

〈何事も楽観的にとらえる車イスの弁護士〉

黒崎隆 弁護士

「人は本来、無限の可能性をもっています。  
『楽しいことをイメージする想像力』さえあれば、  
人生はもっと楽しめるはずですよ」

黒寄 隆



「フロンティア法律事務所」のパートナー弁護士として、一般民事事件の解決や、企業経営に関わるリーガルアドバイスなどに忙しい日々を送っている、そんな黒寄さんが弁護士を目指したのは、大学時代に車イスの生活を送るようになってから。数年前からはブルース・バーのオーナーでもある。

黒寄 隆さん（くろよまき たかし）プロフィール

1961年 熊本県生まれ

1983年 明治大学3年生のときに交通事故に会い、両足の自由を奪われる

1985年 明治大学政治経済学部卒業

1995年 司法試験合格

1998年 東京弁護士会弁護士登録

2000年 「フロンティア法律事務所」開設

2005年 「BAR」BLUES DOG CAFE」開店

〈弁護士を目指すきっかけ〉

車イスでも資格を取れば

自立の道が開ける。

ならば最難関の司法試験を目指す。

黒寄隆さんが車イス生活になったのは、大学時代のバイク事故が原因だった。脊椎損傷を負い、下半身の自由を奪われた。好奇心の強い黒寄さんは、それまで趣味や仲間たちとの活動、アルバイトなどを積極的に楽しみながら、学生生活を満喫していた。そして将来はマスコミ関係で活躍するという夢も描いていた。

しかし歩けなくなったことにより、将来の道は突然、閉ざされてしまった。世界が180度ガラッと変わってしまったのだ。

「希望していたテレビ局の仕事に就くことは、今の自分には到底あり得ないこと。『もう、どうなってもかまわない』と自暴自棄になってしまいました」

と、黒寄さんは当時を語る。

半年間の入院生活の後、さらに半年間のリハビリ入院を続けた。そんななか、黒寄さんは偶然にも、生きる希望を見つけることになる。

同じリハビリ病院で知り合った友人が、四肢マヒでありながら、司法書士の資格を取得していたのだ。彼は自分の力を信じ、自分ができることを大切にして、彼にしかできない人生を歩もうとしていた。

黒寄さんは大いに勇気づけられた。

「ハンディがあっても、自分の力で人生を切り開いている人がいる。だったら、自分にも何かできるのではないだろうか。どうせ一から始めるのなら、自分は一番難しいといわれる司法試験に挑戦してみよう！」

一見、唐突な決心にも見えるかもしれないが、黒寄さんは本気だった。司法試験に合格することを目標に据えたのは、弁護士の仕事に憧れてというよりも、自分を生かす道をもがきながら懸命に模索した結果だった。

大学は政治経済学部に着いていたが、卒業してからは大きく方向転換して、司法試験の世界に足を踏み入れることになった。

〈挫折から救ったものは〉

根からの「超」楽観的思考と

大好きなブルースが

落ち込む心を助けてくれた。

大学卒業後は、両親からの仕送りと専門学校のアルバイトで生活しながら、司法試験の勉強を始めた。両親は、東京で目標に向かって一人頑張る黒寄さんを支え、故郷の熊本からあたたかく見守ってくれた。

とはいうものの、突然の進路変更である。法律を専門的に学んでいない黒寄さんの勉強は、いうまでもなく順調には進まない。法律の専門学校にも通ったが、勉強する以前に、車イスでは校舎の階段に苦勞してしまい、いつのまにか学校からは足が遠のいてしまった。

そんななか大きな力となったのは、母校である明治大学が設置している司法試験受験のための研究室だった。研究室での勉強を手がかりにして、徐々に力をつけてきた黒寄さんが、最初に司法試験に挑んだのは24歳のときだった。結果は不合格。

以来、毎年挑戦したが、不合格が続く。1日8時間は勉強に集中したのだが、5回、6回、7回と失敗。友人たちの充実した仕事振りを片目で見ながら30歳も過ぎてくると、さすがに焦りが出てくじけそうになった。

「合格できるかどうか不安でした。もう、諦めようかとも思いました」

しかし、ここでやめてしまつては、この先の人生が見えない。

不安に思う一方で、

「いつかは受かる!という『根拠のない自信』もどこかにありました」

と、「超」がつくほどの自身の楽観的思考を笑いながら語る。

そして、好んで聴いていたブルースも黒寄さんを支えた。人生の哀歓を歌う切ないブルースは、苦しむ黒寄さんをいつも勇気づけてくれた。

こうして10回めの挑戦でやっと合格を果たすことができた。そのとき黒寄さんは34歳になっていた。

〈どんな弁護士でありたいか〉

自分の心を開くことが、人との信頼を築くカギ。

その信頼を得て、

人様の役に立つ弁護士でありたい。

司法研修を無事終え、さて、就職である。しかし、これがまた困難だった。

法律事務所の多くはビルの一室で開業しており、物理的に車イスでのアクセスが十分な事務所ばかりではなかったのである。なかなか就職先が決まらない。結局、20事務所以上も粘って当たった末に、やっと新宿の弁護士事務所に決まった。所長は事務所のトイレのドアの幅を広げてくれるなど、細かな配慮をしてくれたという。

事務所が決まって一安心の一方で、実際に仕事を始めるにあたって、もうひとつの不安が頭をもたげてきた。

「車イスで本当に仕事ができるのか？ 依頼者からの信頼を得ることができるのか？」

弁護士としての自分の知識や能力は、世間に通用するのか？」

車イスであることはもちろんだが、弁護士としての能力にも不安を感じていた。

「できるか、できないか？ 信頼されるか、されないか？ 仕事をする前からそんなことに思わされていても何ひとつ解決しない。わからない先のことを思い悩むよりも、今自分ができることを確実にこなしていくことが、一番重要ではないだろうか」

持ち前の超楽観的思考が、ここでも顔を出す。地道に経験を重ねていくことで、自信は生まれるという信念のもと、黒寄さんは全力で仕事にあたっていった。

2000年には「フロンティア法律事務所」をパートナー2人と開設。黒寄さんが主に携わる分野は、個人の一般民事事件から企業の経営に関わるリーガルアドバイスと、広い分野を手掛けている。

黒寄さんに依頼する相談者は多い。その理由を聞いてみると、

「私が特別ということではないと思いますよ。ただ経験で得たことは、自分が心を開かなければ、依頼者の心も開くことはできないということでしょうか。まずこちらから鑑を取って心を開きます。そして依頼者が安心してこちらを信頼してこそ、じっくりお話が聞けて、いい解決策を目指すことができるのだと思います」

そして、こうも語る。

「事件が大きいとか、小さいということは仕事の達成感にあまり関係ありません。それよりも、よりよい方向に解決したときには、弁護士として大きな充実感を感じます。これからも自分の力を生かして、最大限、人様の役に立てる仕事がしたいのです」

〈バリアフリーのブルース・バーを経営〉

ブルースとお酒を

誰もが気軽に楽しめる店がほしい。

ないのなら、自分でつくってしまえ！

仕事に全力投球するその一方で、黒寄さんはブルース・バーのオーナーという顔も持っている。2005年に東京・六本木に「ブルース・ドッグ・カフェ」をオープン。好きなブルースとお酒を、車イスでもリラックスして楽しめる場所をつくりたかったの

だという。

「僕はお酒が好きでよく飲みに行っていました。でも行ってみると、段差や階段などがあって入れない店や、窮屈でくつろげない店、またトイレが狭くて入れないといった店が多い。つまりバリアだらけなんです。当然、十分に楽しめません。だから、そんな状況を日頃から不満に思っていて、誰もが楽しめる店はないものだろうか、という思いをずっと持っていました」

そこで黒寄さんは、

「気に入った店がないのなら、自分でつくってしまえばいい」  
と素直に思った。

とはいうものの、誰もが簡単に叶えられることではない。

弁護士になるという希望を叶え、さらには、まったく異なる分野での夢も実現させてしまった、その力の源は何だろう。

「障がいがあるとかないとかは、関係ないのです。人は皆、いろいろな可能性を持っています。できないことに悩むよりも、何ができるかを考えたい。ワクワクするような楽しいことをイメージする想像力。さえあれば、その楽しいイメージに向かって実現す

るための努力をすればいいだけのことです。そうすれば人生はもつと楽しくなると思いませんか？ せっかく生きてるのですから、みんなもつと楽しいことを考えましょよ。そして、人生を楽しみましょよ」

〈どんな社会を望む？〉

障がいがあっても、なくても

皆が共存できる社会を。

そのためには子どもの教育が重要。

「障がいがあっても、自分が望む場所で暮らして、自分を生かす仕事ができ、自由に好きな場所にいけるといった社会が、望ましい姿だと思います」

そのためには、社会的なインフラ、労働環境、教育環境などの整備が、その根拠となる法律とともに必要だ。そして、さらに大切なのは、人々の考え方だという。

「周囲に障がい者がいて、それが当たり前という社会でありたい。そのためには、子どもたちからの教育が重要だと思います」

障がいがあってもなくても、また得意不得意があっても、一緒に学び互いに助け合える心を育てることが、私たちの社会には必要だという黒崎さん。他人との違いを個性ととらえ、互いの存在を尊重する社会であってほしいと語ってくれた。